

南砺のカイヨヨと史跡を見る

7月9日(土)夏の例会として、南砺市南部の旧福光町土生新地区^{はぶしん}の屋敷林と歴史にふれる集いを行った。16名の参加で、地元の古老 奥野潤治氏に案内頂いた。

当日の様子は北日本新聞が翌日朝刊に報道した。

× × × ×

栗山悟氏宅屋敷林の見学をメインとして(別項)立野原演習場のなごりとして残されている実弾訓練時に使われた「メダマ監的坑」も見学した。

明治31年、立野原の3,800haが軍に取り上げられ、住民は数度に渡って移転させられた。戦後開拓され、農産物、干柿の産地として利用されている。

現在、この立野原の真中に「次郎右衛門堂」がある。約200年前(文政年間)立野新を、次郎右衛門が中心になって開墾し、そこに小社を建立し神を祀った。

明治期数戸の農家が管理してきたが、陸軍に取り上げられ立ち退きになり、御神体は別に移し、動かさなかった石段とスギ林を「次郎右衛門堂」として残し伝えられてきた。立野原開拓の歴史を知らせる一つの形である。案内いただいた奥野氏もこの立野原の麓に住居があり、家は移築もさせられ、戦争という非人間的体験をさせられた証人の1人で、案内には特に重みを感じた。

× × × ×

南砺の平野部の最南端のカイヨヨと歴史にふれた見学会は好天に恵まれ、楽しさを残し昼食前に解散した。



立野原・メダマ監的坑

「栗山氏宅屋敷林にひたる」

栗山悟氏宅屋敷林を選定した理由は、古樹の成立と古い話が伝えられていること。どこの家や屋敷林でも必ず歴史がある。この栗山家は、豪農で小矢部石を多く用いた庭が造られ、加賀藩三代藩主前田利常公がこの地に鷹狩りに来た時、休息したと伝えられている。

その面影がスギの古木からしのばれる。

二つ目には、南砺市の屋敷林見学を通し、砺波平野全域のカイヨヨ保全への効果を期待したことである。

× × × ×

3本のスギの大木はいずれも変形していて双立し、樹高30m、1本の幹周り4mとその風格は見事なものである。いずれも樹勢は良好。それを支え包むように、ケヤキ、カシの中木とアオキ、ツゲ、ヒサカキが下木として多数成立し、家屋南面の池と庭をかこみ、立体的で重厚な樹叢をつくる。現存する屋敷林は300㎡程でそれほど広くはないが、樹木の成立する区域に高低差があり、外側にはアオキやヒサカキの中小木が繁り、自然の生垣が出来ている。

庭の池の石は小矢部川産のもので、当家の栗山静枝さんの話では、殿様のお休みになった庭として伝え聞いている。今は、池には水は入っていないが、その頃は水が入り石組みが奇麗で殿様は縁側から眺められたのではないか。

スギは300年くらい。数年前の台風で1本倒れ、戦前には供木もした。家の西面にも屋敷があったが、耕地整理で無くなった。

また、この家の前には、福光町教育委員会の案内板が立てられていた。その題は「殿様お休みの庭」として、鷹狩りの折り豪農であった栗山家で休息され、庭をみながらお茶を飲み、そのお茶菓子として出された土生新産の干柿を大変美味しがられ、その後、毎年献上することになった。後に、干柿がこの地方の特産となり金沢の三社町で売られるようになった。と印されている。

× × × ×

スギの大木に象徴される土地の歴史にひたり、生きた伝承者としてのカイヨヨの姿に感動した。大小、長短はあってもカイヨヨと人の物語は必ずそれぞれの家に生きつづけていることを確認しあった。

案内された奥野さんは、「この庭と樹木は、地域の誇りで宝だ。後世に引き継いでいきたい」と話された。

又、参加した和田 健さんは、「ハサミの入れない自然態のカイヨヨが大きな魅力だ。これだけ古くて大きいスギのあることを、直径等で数値にして残していく作業をやってあげれば良い」との感想を。



栗山宅屋敷林

「富山砺波散村の変貌と地理学者」 会員の新藤正夫さん出版

会員の新藤正夫さんが最近「富山砺波散村の変貌と地理学者」を出版された。この編集コメントを人間文化研究機構・機構長の金田章裕氏があたってみえる。内容は、第一章から第五章まであり、砺波散村の成立と展開、近代化と農業、工業と農村、散村の持続と問題点等に整理されている。その章ごとに金田氏のコメントが入っていて、その章の意図することや概要が理解できる。砺波散村に軸足を置いた長年の研究や論文をまとめられたもので、基調な資料として今後生きる学術書である。カイニョに直接関わる内容として「台風23号による砺波市小島集落の屋敷林被害」があり、今後へも大いに参考になる。その出版を喜ぶ会が7月15日平安閣で行われた。

「全国屋敷林フォーラム記録誌」完成

昨年の全国屋敷林フォーラムの全発言内容をまとめた記録誌が出来上がりました。研究や資料として希望される方は、事務局へ連絡して下さい。部数に限りがあり先着順とさせていただきます
事務局—電話FAX 0763-33-6588 天野まで

「稲作 小言」

明治時代に書かれた文書を、会員の加藤悦夫さんから届けられた。今の農政と農業を考える上での忠告に値する。

「稲作小言」

ヤレヤレ皆様 しばらくお耳を拝借しますよ
私と申すは ずうつと昔の そのまた昔の神代の時代に
豊葦原より現れ出ましてそれより日本に広まりましたる お米であります

飯にはもちろん 酒でも寿司でも 菓子でも味噌でも お米で作れば
味わいよろしく 紙すく糊にも 布はる糊にも 調法いたして 無類のものなり
とげる時分に 出たる粉糠は 牛馬の食料
風呂湯に有用 肥料に要用 沢庵漬けには最も必要
糠味噌にも これまた同様

そのまわら飢饉の食料製紙の材料

繩・みの・むしろに俵に臥に 草鞋に脚半に 農家のふき草
垣壁などに 添えるはもちろん 貯蓄のたねもの 包んでおくなら
温気は通さず 湿気も犯さず、焚きてはその灰、種々に必要
腐敗しますりや 肥料に適當 そのほか効用 枚挙はつきせず

然るにこのころ お米を廃して 肉食世界に 改良しなされる
お説も聞いたが 肉食世界を 拒むじやなれど 獸類なにはと
繁殖なすとも 値段が高くちや 下等の人民 食うことかなわす
米なら三錢 四錢でたくさん
穀類作れば一反一反の 僅かな田地の 収獲ものでも一戸の家内の
四人や五人は 年中食して余りがあります
牛馬を一頭育ててみなさい ある人申すに数年原野に
放牧するには一頭飼育に 六、七町余りの 地面を要すと
ヤレヤレ皆様 よく聞きなされよ
六、七町余に 一頭ぐらいを飼うよなことで 三千八百余万の人民
匂いをかぐには 足りるであろうが
食うには足るまい 足らざるときには肉類輸入し つまりは必ず お国の損耗

近年お米が 豊作続きで 安値であれども 安値であるとして捨ててはいけない
十分はげんで 智力をつくして光沢味わい 最もよろしき 上等種類を多分に作りて
どしどし輸出し外国一般その良き味わい 十分知らしめ
肉食世界を 米食世界に 変ずるよようにと尽力するこそ 農家の職分
皆様はげんで勉強しなされ 勉強なさればお金はとつさり 日本に充満 日本に充満

明治二十年 船津伝次平 作